

自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0174600197		
法人名	社会福祉法人 慧誠会		
事業所名	グループホーム ベルエポック		
所在地	帯広市川西町西1線47番地6		
自己評価作成日	平成 28年1月8日	評価結果市町村受理日	平成28年3月28日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度の公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先URL	http://www.kaigokensaku.jp/01/index.php?action=kouhyou_detail_2015_022_kani=true&JigvosyoCd=0174600197-00&PrefCd=01&VersionCd=022
-------------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ニッポン・アクティブライフ・クラブ		
所在地	江別市大麻新町14-9 ナルク江別内		
訪問調査日	平成28年1月29日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

1・ご家族、地域とともに・・・入居されたから職員ですべてを行うのではなく、職員だからできる事、家族だからできる事を考えながら、個々人にあった支援を行っている。また、地域(運営推進会議委員やボランティア等)の方々と共に本人の暮らしを作ることを大切にしています。しかし、入居前までの状況や関係性によっては、一律に同じ協力を得ることは難しい事から、できる範囲の協力から始めていただく事を大切にしています。地域の方には行事だけの参加ではなく、普段の生活の様子を見ていただく機会を多く持てるよう配慮しています。
2・OJTの充実・・・意見を出せる場面＝会議という形にとられず、個々の職員が何を思い、何をしたいのかを日常の中で表現することを大切にしています。そこから生まれたケアの方向性や決まり事をチームノートなどを使って、全員が顔を揃える事ができなくても、意見交換ができるよう心掛け、お互いのことを知りながら成長していけるよう心掛けています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当事業所は十勝平野の自然豊かな農村地帯に位置し、母体法人が運営する福祉施設群がコミュニティを形成し、事業所はお互いに事例を共有して質の高いケアに努めている。共用の空間は、居間の南一面が開放されているので陽光が降り注いで明るく、トイレも中央部に複数あるために使い勝手が良く、調理室が中央にあり職員が仕事をしながら利用者動線観察が容易で、利用者は安心して思い思いに過ごしている。管理者、職員は明るく、管理者を筆頭にするとにかく笑う笑う・・・それにつられて職員も利用者も笑顔が多く談笑の輪の中に自然と溶け込んでいる。利用者は、地域の老人会などに参加し、保育所や小学校の運動会で交流し、事業所の忘年会、夏祭りなどに、家族、地域住民が参加して相互に交流し共に利用者支援し、地域住民、家族との連携も極めて良好である。一例は利用者の子息のお嫁さんが頻度高く来訪してボランティア活動をしている。外から見たら職員と変わらない動き方である。又、もう一人地域の方が頻度高くボランティア活動をしている。職員の動きと変わらない。南に行くと川西市街地と団地があり当事業所では将来の夢を描いている。それは運営推進会議を核にして「地域との交流組織」づくりであり早く実現出来る事を期待する。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価及び外部評価結果

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	1	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	グループホームは法人の「基本理念」、高齢者部門の「ケア理念」、更に「グループホーム基本理念」に基づいて運営している。法人理念には「地域に還元する」事が明記されており、建物の中で職員だけでケアを提供するのではなく、ボランティアや家族の力を借りながら、地域還元を実践している。	法人理念、事業所基本理念を職員は理解し共有している。毎年、見直しをしながら、地域密着型サービスの意義を全員で確認し、家族や地域との関係性を重視した理念の理解に努めている。	
2	2	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	施設見学や慰問、ボランティアの受け入れを行い、地域とのつながりを維持するよう努めている。また、同敷地内他サービスの行事にも積極的に参加をしている。利用者の身体レベルの低下もあり出かけるという機会は少なくなっているが、地域ボランティアは定着してきている。	老人会などの地域の行事に参加して交流し、事業所の行事に地域住民が参加して相互に交流している。家族と地域のボランティアが来訪し一見職員と変わらない動きで奉仕をしている。サポーター養成講座を開催したり、見学者には生活相談なども行って地域に還元している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	見学者(入居希望)は定期的であり、GHの説明だけではなく、その際に「生活相談」等を受ける事が多く、認知症の方との付き合い方やアドバイスをさせていただいている。		
4	3	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議メンバーには、GHの評価だけでなく、様々な行事の企画から参加をいただき、中の利用者や職員とじかに触れ合う機会を設けている。	2ヶ月に1回、町内会代表、家族、地域包括支援センター職員などが出席して開催し、運営状況、行事、事故報告などについて報告し、意見や助言を得て、サービス向上に活かしている。議事録は懇切丁寧な記述で、前回の課題についての継続した議論がある。次回に向けた課題の共有と克服する意欲が感じられる。	運営推進会議は、家族、地域の人たちが運営を見守ったり、協力者として助言するなど運営上重要な意味、役割を果たす会議として位置づけられていることから、地域との連携拡大を目指した意見、助言を得ながら、更なるサービス向上に活かすことを期待する。
5	4	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	敬老会には市高齢者福祉課課長に来賓として参加をさせていただいている。	認定更新時には担当者へ利用者の暮らしぶりや具体的な話題を伝え、様々な機会を通じて不明な点を問い合わせたり情報を得ながら連携を深めている。	
6	5	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束が必要な事例はない。また、日常生活においても肉体的な拘束にとどまらず、「言葉」による拘束にも気を付けている。同法人内での身体拘束研修会が定期的にあるので、それに参加をし意識付けを行っている。	母体法人は「高齢者の権利擁護や拘束のないご奉仕」が基本姿勢である。従って、拘束に関する職員の理解度が高い。内部・外部の研修会に参加して、身体拘束をしないケアに努めている。言葉による拘束に気をつけ、日々の申し送り時の「振り返り、気づき、利用者への抑圧感」などを大事にしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	自分たちが認識している虐待と本人や周りが受ける虐待の内容が必ずしも同一とは考えない事を常に自覚しながら、日々のケアに取り組んでいます。また同法人内での虐待研修会(身体拘束研修会と同一)に参加し意識付けを行っている。		

グループホーム ベルエポック

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修会での報告・学習により、日常生活においてそれを具体的に身に付けて行くことを心掛けている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には契約書・重要事項説明書・個人情報保護などについて説明を行ったうえで、不明な点や疑問点の確認を行う。特に医療的処置が必要となった場合の説明等、ご家族が一番不安と思われる項目については、時間をかけて説明し、納得いただいてから署名・捺印をいただいている。		
10	6	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	苦情受付係を施設内に配置し、同時に第三者委員会を設け、利用者家族が苦情(それに類似するもの)を訴えやすい配慮をしている。また運営推進会議も家族の方に委員に入ってもらい、開催時は必ず声をかけできるだけ参加をお願いしている。	日常の会話などから利用者の意向の把握に努め、家族とは手紙や運営推進会議、家族会等で来訪時に意見、要望を聞いて運営に反映させている。常に問いかけて何でも言ってもらえる雰囲気づくりに努めている。	
11	7	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	適時又は迅速に対応するために会議の場というよりも、日常において直接、意見公開や検討を行う。	管理者は、職員が意見を言いやすい雰囲気を日頃から作り、チームワークづくりと意見の共有に努めている。日常意見交換を行って運営に反映するよう努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人全体で人事考課制度を導入し、自身で目標設定を行い、個人並びに考課者が支援しながら、達成に向けて努力していく。考課結果が良ければ、報酬等での評価を行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	人事考課による目標をGH内で掲げ、それをGH内で公表し、個人の目標を全体で達成できるような独自の取り組みを行っている。それによりOJTの活性化を期待している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	各研修会の他、法人内GHと入居者の対応や待機者リストの共通化など、現状と照らし合わせながら、話し合いをもうけている。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前後にかかわらず、ご家族を含め話をすることを大切にしている。その中で聞くことが出来た心配ごとや希望を聞かせて頂いたら、職員間で協議・共有を図っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前はもちろん、入居後もインテークを行う場を設け、その中で具体的な本人の生活への希望を聞かせていただく。あわせて、GHでの家族の役割についても積極的にお話をするようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	双方ともに納得できるよう、生活の中で「優先すべきことは何か」「何を課題にするのか」を明確にし、必要であれば同法人サービスの専門職に協力を求めるなどを行っている。		
18		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者が何かをする役割だけではなく、そこにいることを実感できるような役割を意図的に作る事で、個人の居場所を作るようにしている。		
19		○本人を共に支え合う家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ささいな事でも、ご家族に報告・相談をするようにしている。その中でご家族にも「まだ出来る事がある」という安心感を持っていただきたい。また、その思いから、ご家族自身が何が出来るかを考えていただく。		
20	8	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	かぎられた家族だけではなく、孫やひ孫の面会が多くなっている。家族が一緒に、自分の家族に会いにくるという面会のいみだけではなく、遊びに来る雰囲気大切にしている。	利用者の生活歴を把握し、知人、友人など馴染みの関係が途切れないよう努めている。家族の来訪が多い。知人の来訪もある。特筆されるのは利用者の子息のお嫁さんが頻度高くボランティア活動で来訪している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士を結んでいくことを、職員の仕事として重要視している。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	医療機関への継続入院によりやむなく「契約終了」となる事があります。しかし退所後も職員が電話連絡いれたり、その後のフォロー(他施設への入居・病院Swとの連携)を行っている。また、退所後も家族が遊びに来てくれることもある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	9	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	職員一人一人の目を通じて、一方向だけの視点で考えるのではなく、多角的に一人の利用者をとらえたうえで、方向性を決めていく事を心掛けている。	会話や表情など日々の関りの中で、また、家族の情報から思いや意向の把握に努め、職員で共有して、希望や意向に添うよう努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	何度も繰り返し行われる、本人や家族とのやり取りの中で、共通にしながら、その方の歴史を一つずつ埋めていく。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	持っている能力の把握と推測を組み合わせながら、「自発性」を第一に、様々な環境を作るようにしている。		
26	10	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	入所時や状態などの変化があった際、職員間で意見を出し合うようにしています。本人・家族の意見などもふまえて、計画に反映しています。モニタリングは、期間ごと・半年ごと年間事など工夫しながら、変化を把握することと同時に職員自身の振り返りにも役立てる。	利用者、家族の意向を反映させ、職員で話し合っ、6ヶ月毎に現状に即した介護計画を作成して家族の確認を得ている。状況に変化があった時にはその都度見直す事としている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の日誌や個人記録への記録は継続的に行っている。その記録をモニタリングや介護計画書見直しの参考としている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	日所の関わりを通じて職員の発想「やってみよう」という意欲を表現することを大切にしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の運営推進会議委員やボランティアの積極的な参画により、非常時の協力や職員・家族以外との交流を持つことが出来ている。		
30	11	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	当苑主治医または、以前より使っている医療機関と連携している。急な体調変化等には職員と配置されている看護師が連携し即対応を心掛けている。	本人や家族の希望に添ったかかりつけ医に受診できるよう支援している。通院は家族同行が基本であるが、その時により家族の付き添いが難しい場合には職員が同行している。	

自己評価	外部評価	項目	自己評価		外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日常の状態との変化を客観的に比較し、すべての判断を看護職にたよるのではなく、介護職員も身体不調等の予見をしながら、日々の対応にあたれるよう心掛けている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	医療側とのやり取りは、家族にすべてお任せするのではなく、職員も同席もしくは、病院側との情報交換を積極的に行い、早期退院に向けた動きをとるようにすること、本人、家族の不安解消に努めています。			
33	12	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時に重度化した場合にGHが出来ることを家族に説明しています。そのうえで契約としていきます。現在も、高齢化と重度化はしていますが、その場面になって、改めて考え始めるのではなく、日常の中で家族と常に「今後」というテーマでお話しをしながら家族・本人の希望、そしてGHとしての対応方法を伝えています。	契約時に「重度化した場合における対応に係わる指針」に基づき利用者、家族に説明し理解を得ている。重度化が認められた段階で、本人、家族、医師と協議し、看取りなど希望に添えるよう支援している。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	AEDの使用方法・誤嚥や嘔吐による窒息への対応等については勉強会などを通じて、冷静に対応できるよう準備をしている。また緊急連絡に関してもまず自分がやらなければいけない事を日常的に確認している。			
35	13	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に避難訓練を実施。特に夜間等、職員が一人しかいない状況で火災・地震を想定した訓練を行っている。	年2回(日中想定、夜間想定)、消防署、運営推進会議参加者、地域の方々なども参加して定期的な避難訓練を行っている。 災害に備えて屋外で使えるストーブを用意している。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	14	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉のかけ方や立ち居振る舞いを日常は一番気を付けている。狭い空間なので、雰囲気や相手を不快にさせてしまう事もある事を意識している。また、一人一人の理解力に合わせた言葉を使う事により、相手が不安や不快を感じる事が無いよう気を付けている。	言葉かけに気をつけ、尊厳や誇りを損ねないケアに努めている。援助が必要な時にも、まづ、本人の気持ちを大事に考えてさりげないケアを心がけたり自己決定しやすい言葉掛けをするように努めている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	「自分がやってみたい」と思っていたかのような仕掛けや言葉がけを行い、その延長上で自己決定できる働きかけを行っている。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個々が望む生活。実現できるかどうかはその方の能力も関係してくると思うが、少しでもその方の気持ちに沿えるよう、とにかく「待つ」という事を大切にしながら支援をしています。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	日々の静養の実施だけにとどまらず、本人の好みや特に女性はいつまでも自分の姿を気にしてもらおう生活を送っていただくためにも、鏡で自分を確認する。姿をほめるという事を大切にしています。			

グループホーム ベルエポック

自己評価	外部評価	項目	自己評価		外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容	
40	15	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	重度化に伴い、買い物同行やメニューの決定が日常的に実施することが困難となつてはいますが、食事関連で「自分が役に立っている」と感じられるよう、洗いや意図的にお願している方がいたり、食事のメニューから、昔の話につなげたりと、少しでも食事が生活の中で生きてくよう心掛けています。	能力に応じ、献立を利用者と一緒に考え、朝夕独自のメニューづくりの相談と買物同行もある。職員が同じテーブルで食事をして歓談している。季節には畑に植えた野菜の収穫とそれを調理される機会が多くある。食事を一日の大事な活動の一つとしている。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	本人の嗜好もあるので、極力好んでもらえるものをお勧めし脱水や低栄養の予防に努めている。補食としてもおやつを各種用意し、食事量・糖分のバランスには気を付けながら、提供している。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後、自菌、義歯を磨き、最終口腔内に食物の残渣がないかをチェックする。義歯の方は寝る前は外していただき、洗浄剤での洗浄を実施している。			
43	16	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	時間での誘導だけではなく、個人の様子をかんがみながら排泄がしたくても、訴えられない方に対しては、変化を察知し誘導を実施している。	排泄チェック表を基に、表情、態度などから把握して、適時にさりげなくトイレに誘導し、排泄の自立に繋げている。失敗してしまった場合は、周りに気づかれないよう下着交換を行い、自尊心に配慮した支援を行っている。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分の摂取を中心に、便秘予防を図っている。また、移動、移乗に介助が必要な方であっても、おむつ交換ではなく、トイレに座る事を実施している。			
45	17	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	日時を固定しての入居実施ではなく、排せつ同様その方が入浴をするという認識をもった状態を作ったうえで、実施するようにしている。また、ADLの低下にともない、1名の職員介助では安全を保てないときは、2名体制での入浴介助も適宜行っている。	基本的には日時を固定しないで、利用者が入浴したい日時に合わせて入浴をしている。浴槽が深いので利用者の体力、身長に応じて浴槽内に深さの調節台を設置して、肩までゆったりと浸かりたい利用者にも対応でき入浴を楽しんでいる。		
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	24時間サイクルでの個人記憶を参考に、睡眠時間や覚醒時間を把握。必要であれば、居室へ誘導し休んでいただいたり、逆に、活動を促すことで意図的に覚醒をしていただく事もある。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の調整は、普段の様子を主治医へ伝え、適宜調整をはかり、現在の状況にあわせた内服環境を整えるよう、努めている。また、新薬や臨時薬が処方された場合は、必ず内服方法、効能を確認するようにしている。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりが「自分が役に立っている」と感じられるよう、たとえ、結果が不自由分であったとしても、感謝の気持ちを忘れないよう言葉をかける事を大切にしている。			

グループホーム ベルエポック

自己評価	外部評価	項目	自己評価		外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容	
49	18	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	職員だけではなく、家族や運営推進委員、ボランティアの方々と外出や、自宅や親族の家に遊びに行くなど、個人が楽しむことが出来る外出となれるよう工夫している。	散歩、買物同行、墓参り、一人ひとりの習慣や楽しみごとに合わせて自宅や親族の家に出かけるなど、五感刺激やストレス解消のために外出の機会を作っている。		
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭の認識をされている方は、少ないが、「買い物をしたい」という感情が出た際には、ご家族了承のもと、施設立て替えでも構わないので、思ったときに動きが取れるよう心掛けている。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話いつでも掛ける事が出来る状態にしている。またご家族には、本人の安心のためにも、声を聴かせていただく目的で電話をさせていただき事があるかもしれないことを事前に伝えている。			
52	19	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れたもの、家族がこれを置きたいというものは極力おいていただいている。まれに、気づかないうちに、火器が荷物に紛れている事があるので、その際は、GH側の判断で管理をさせていただき旨を事前に伝えている。	居間は陽光が入り明るく、写真を掲示し、調度品は利用者にとって懐かしく感じたり、使い易い物品を選んで置いている。フロアの飾り付けや家具の配置は利用者と一緒に考えて、自分が住んでいる家だという意識を高めて貰うようにしている。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	手をかけたい場所に意図的に椅子や机を置いて、自然な形で過ごしやすい、かつ安全な環境作りを心掛けている。			
54	20	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	火器や危険と判断されるものに関しては、入居の前に、ご家族にも確認していただき預らせていただいています。それ以外は本人が使い慣れたものや思い出の品、仏壇等を置いていただいている。	使い慣れた家具、想いでの写真、仏壇などを持ち込んで居心地よく過ごせるよう工夫している。仏壇の線香に使用する為の「マッチ、ライター持込み使用」を、火災防止の為に、しないようお願いをしている。居室は、8.5畳と広々としているのでゆったりとしている。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	常設の手すり以外に机や椅子を動線上に配置し、それに掴まりながらも「歩く」という事を自身で実施してもらっている。又、車椅子の方も増えているので、スペースを少しでも広く取れるよう、殺風景にならない程度に障書を取り除いている。			